

泉の森 なんでも情報館

2014年 秋号(No.15)

発行 しらかしのいえボランティア協議会
エリアマップ作成班

クローズアップエリア しらかしのいえ周辺

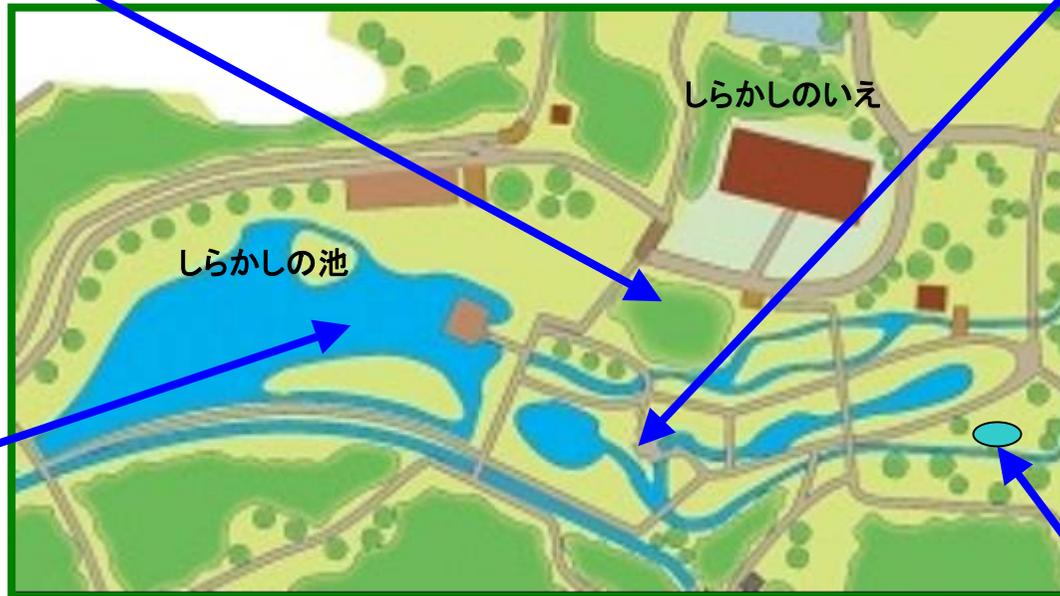
スポーツの秋・芸術の秋・食欲の秋…秋を満喫するには、健康でなくっちゃ！ ところで森にも健康な森とそうでない森があります。健康な森って、どんな森でしょう？ 泉の森はどっち？ 秋深まる泉の森を散歩しながら、森の健康について考えてみませんか？



しらかしのいえの前の林は憩いの広場・・・さて、以前はどうだったのでしょうか？ (p. 2)



渡ってきたカモたちで「しらかしの池」がにぎわう季節です (p. 4)



ハッ橋デッキ…どうして”ハッ橋”なんでしょう？ (p. 3)



まむし池でマダム・クサギがお待ちしています (p. 4)

泉の森の木のものがたり(2) センター前の林 “こならの広場”

自然観察センターしらかしのいえの前の林は憩いの広場。子供達がお弁当を広げて楽しそうにしている風景はもう見慣れたものになりましたね。この風景、実は写真1の通り今から5年前に始まったもの…その前はどうかっただけでしょう？

写真2は、しらかしの池広場から見たこの林の昔の様子。泉の森に長く来られている方はご存知でしょうが、この林、トウネズミモチやハリエンジュ(ニセアカシア)、コナラなどが密生する、とても薄暗い林だったのです。

そして今、写真2と同じ場所から撮ったのが写真3です。こもれびにあふれる広場に変わったわけですが、これに至る経緯を自然観察センターの秋山さんに教えてもらいました(写真1, 2は秋山さん提供です)。

この林の伐採は、管轄する防衛庁の許可をもらい2009年2~3月に行われたもの。樹木が茂り過ぎ、日が当たらず林床に下草も生えない林を、健全な林に変える目的で行い外来種であるトウネズミモチ、ハリエンジュを伐採したそうです。でも、この目的をなかなかわかってもらえず、あちこちからクレームが来て、その対応にとっても苦労したとのこと。

当時私もなんで伐るのかと思っていましたが、今は納得…なにもせず”緑を守る”と叫ぶだけより、いかに健全な森にして子供達に残すか、が大切なことと思っています。この場所は、これから“こならの広場”と呼んでいくことになっているそうです。ときどきこうした経緯を思い出して大事に使っていきましょう。(伊藤 健一)



写真1:2009年5月



写真2:2000年2月



写真3:2014年9月

ところで、トウネズミモチって どんな木？

左の記事に登場する「トウネズミモチ」は、センター前広場の林でいちばん多かった木、つまり、この林を薄暗くしていた張本人ともいえる木ですが、どんな木かご存知でしょうか？

外来種トウネズミモチの前にまず、在来種のネズミモチをご紹介します。ネズミモチのモチはお餅ではなく、昔、鳥を捕まえるために使った「鳥もち」のこと。あっ、ネズミモチの前にモチノキを紹介しなくては…！モチノキはモチノキ科モチノキ属の常緑高木で、秋に赤く熟する実は鳥の大好物です。この木の樹皮から「鳥もち」が作られます。一方、ネズミモチはモクセイ科イボタ属。モチノキ科ではないのですが、その葉がモチノキの葉とよく似ているため「モチ」の名前が付けられました。

じゃあ、ネズミは？ その実がネズミの糞に似ているからだそうです。最近ではネズミの糞なんて見かけないのでピンときませんが、たしかに私たちの目には美味しそうには見えませんね。でもこの実もまた、鳥たちによく食べられます。

「ネズミモチ」をお分かりいただいたところで、いよいよトウネズミモチの登場です。「トウ」とは何でしょう？ ヒントは外来種で原産地は中国ということ…そうです、「トウ」イコール「唐」。唐の国から来たネズミモチそっくりな木、ということです。この2種はほんとうに見分けが難しいのですが、トウネズミモチの方が、実がびっしりつきます(下の写真)。とは言っても2種を並べてみないと難しいですよ。もう一つの見分け方は葉を太陽に透かしてみると葉脈が透けて見えるほうがトウネズミモチです(下図)。「唐」ネズミモチは「透」ネズミモチ、と覚えるといいでしょう。

トウネズミモチは、センター前広場では伐採されましたが、他の場所にあります。ネズミモチも泉の森にあります。興味がある方、探して比べてみてください。

(小林 みどり)

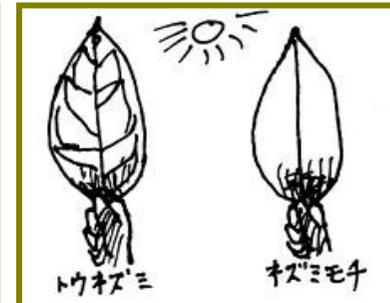


写真:トウネズミモチの未熟な実。熟すると紫色になる。図:♪葉っぱを太陽に透かしてみれば～♪ 注意:なるべく大きな葉で試してください。新しい小さな葉だと両方とも透けます。

ハッ橋デッキ

最近、ドラマの舞台として使われたりする泉の森の緑のかけ橋や湿生植物園ですが、その湿生植物園の中のデッキはハッ橋（やつはし）デッキと呼ばれています。このハッ橋という名の由来は何でしょう。デッキの数は数え方によっては八つあると言えなくもないのですがかなり無理があります。それとも伊勢物語の「八橋（やつはし）」からとったのでしょうか。その八橋の話とハッ橋デッキは似たところがあるのでしょうか。そこで伊勢物語の八橋について調べてみました。

八橋の話は伊勢物語の第九段「東下り」にあります。都ではもう必要とされていないと思ひ込んだ傷心の男（在原業平ではないかといわれている）が東国に新天地を求めて旅に出て三河の国まできます。川が蜘蛛手状（流れが蜘蛛の手のように八方に分かれている状態）になり、橋が八つかかる八橋という場所にかきつばたが美しく咲いていたのでそこで食事をとることになりました。そのとき連れの間から、かきつばたの五文字を頭に読み込んで歌を作ってみよといわれ、つくったのが、右に掲げた歌です。

（意味：最初は着にくかった唐衣もやがてなれて着やすくなるように、長年連れ添って慣れ親しんだ妻を都においてここまで来てしまったが、はるばる旅して来てしみじみ悲しく思うものだ）

この歌を聞いた一同は、それぞれ都のことを思い出して皆ポタポタ涙を流し、乾飯が涙でふやけてしまったという話です。

からごろも
着つなれにし
つましあれば
はるばる来ぬる
たびをしぞおもふ

伊勢物語の橋の数については古くから議論があって、八つあったという説と、八つとは多いという意味で八つとは限らないという説があり、決着はついていません。

湿生植物園は引地川が一種の湿地帯のようになったところに菖蒲田があり、そこにハッ橋デッキが作られています。かきつばたと花菖蒲・あやめの違いはありますが、橋の数も八つに拘らなくてよい説をとれば伊勢物語の八橋と似た環境であるといえそうですね。

在原業平はひじょうに高貴な血筋の生まれで、美男で和歌の才能に恵まれていました。その歌は古今和歌集にも数多く収められています。妻は紀有常の女（むすめ）。伊勢神宮の斎宮との禁断の恋など恋多き人生を送った人ですが、宮廷の中ではなぜか不遇のときが長かったようです。

緑に囲まれたハッ橋デッキで、ときどき遠い昔のみやびな貴公子やその長い旅路、妻、禁断の恋などに思いを馳せてみるのもおもしろいかもしれません。（橋本幸夫）



←湿生植物園のハッ橋デッキ
ハナショウブの見ごろは
5月中旬～6月です。

マダム・クサギの ごきげんな秋

クサギ *Clerodendron tricotomum* (クマツヅラ科クサギ属)

ごきげんよう。わたくし、まむし池のほとりのクサギでございます。わたくしの名前を漢字で書くと「臭木」。もう少しマシな名前をつけていただきたかったわ…でも仕方ないわね。わたくしの葉って、ほんとうにくさいんですもの。中にはこのにおいがけっこう好き、と言ってくれる方もいるけれどね。

そうそう、わたくしの花もけっこう強いにおいなので、好き嫌いがあるかもしれないわね。でも蝶の皆さんにはモテモテなのよ。特に、クロアゲハ、モンキアゲハといった“黒服”の皆さんたちに大人気。葉っぱをムシャムシャ食べていた赤ちゃん(幼虫)のころから見守っていた子たちが立派な大人になって、花の蜜を吸いに来てくださった時なんか、ほんとうに嬉しいのよ。

そして今、わたくしはとってもご機嫌なの。だって今年もたくさんの実をつけることができたのですもの。わたくしの実は、人間の皆さんにも評判がよくて「アクセサリーになりそうね」なんて言ってくれるお嬢さん方も多いのよ。それも嬉しいけれど、もっと嬉しいのは、鳥さん達がこれを食べてくださいること。食べられた実は鳥さんのお腹を通過していろいろなところに運ばれ、運が良ければそこで根を張り、芽を出して、新しい樹に育ってゆく。こうしてマダム・クサギの遺伝子が受け継がれてゆくよ。

柔らかな秋の陽射しの中で、鳥さん達を待ちながら、今、思い出にひたっているの。葉をちぎられて「クッセ〜」と言われたこと・「いやいや、いいにおいだよ。花もきれいだし」と言ってくれた優しい人のこと・蜜を吸いに来てくれた蝶のみなさん達・今年最初の実を食べに来てくれた鳥さんのこと…たくさん生きものたちとつながりが持てて、今年もいい年でしたわ…

(マダム・クサギ 談/小林みどり 記録)



クサギの花



クサギの実

冬鳥に遭いに…しらかしの池のカモたち

ここ泉の森の「しらかしの池」には、9月末になると冬鳥として越冬するためにいろんな種類のカモたちが来始めます。それまでここに一年中いる鴨・カルガモはどうするのでしょうか？ 寒い間、あまり池では見かけられなくなります。今年も10羽ほどのカルガモがしらかしの池やその上流のしょうぶ田で夏を楽しんでいました。ある朝、コガモ、ヒドリガモが池で泳いでいるのを発見。渡ってきたばかりはコガモたちの数が少ないので、カルガモも池と一緒にいます。ヒドリガモたちの数が増えてくると、カルガモは引地川を下って、あるいは、群れになって大空に飛び出してほかの水辺に移っていくようです。奥の水源地にいることもあります。

日本海を渡り、中国東北部から飛来する冬鳥としてのカモたちは、地付きのカモたちより力関係では強いと思われ、ヒドリガモなどが池から今までいたカルガモを追い出す様なことも見られます。例年、一番早く池に来るコガモは、日本により近い中国東北部に住んでいるのではとされています。そして、帰るときは一番遅くまで日本にいても、言われています。コガモも池にいるよりは引地川に出て、餌を食べたり、また、緑のかけ橋から下を見ると水辺で餌を探しているのが見られます。

昔はマガモ、キンクロハジロ、ホシハジロと順番に来るのが決まっていたような思いがしますが、この頃はそうでもなく、鳥の数もたいへん少なくなってきました。昨年の冬もホシハジロは本当に少なかったです。特に大陸で豊作だったという話があって、日本に来るカモたちが少ししか渡ってきませんでした。

今までこの「しらかしの池」を訪れたカモたちはマガモ、カルガモ、コガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモたちです。 (藤井和子)

次号は2015年1月ごろ発行の予定です。ちょっと早いけれど、よいお年を！